

平成16年度第4回学術講演会（講演抄録）

## 「薬害エイズからみた人権・平和」

Human rights peace from the chemical injury AIDS' point of view

講師 川 田 龍 平

（松本大学非常勤講師）

「薬害エイズ」の問題を知らない若者が増えている。スモン、サリドマイド、エイズ、ヤコブ病など「薬害」は何度も繰り返し引き起こされている。薬害を繰り返し引き起こしてきた原因には、政治家、官僚、製薬企業、医者らの癒着した構造に問題があると言われている。この構造の問題は過去の問題ではなく、これからも誰に起こるか分からない自分たちの問題として考えてほしい。自分はH I V感染者としてではなく、「薬害エイズ」の被害者として、薬害が繰り返される原因を明らかにし悲劇を繰り返さないために、実名を公表し、国を相手にした裁判を闘ってきた。

しかし、H I V治療を続けることや学生と日常的に接する中で、薬害だけでなく性行為によるH I V感染の問題も深刻に感じてきた。先進国と呼ばれる国の中で、日本だけが新たな感染者の数を増加させている。現在では、性行為を通じての感染がほとんどである。エイズを特別視した「エイズ教育」が、偏見を植え付け、差別へとつながり、予防にもなっていない。エイズを特別な病気、特別な人のかかる病気として見る見方ではなく、命のつながりを教える性教育の中で、性感染症の1つとしてしっかり教えることが必要である。そして性を肯定的に生き方についても伝えることが大事だ。

日本も含めて世界では、4000万人のH I V感染者、年に300万人以上がエイズによって亡くなっている。感染者＝エイズ患者ではなく、薬によってエイズの発症を抑えられるようになってきているが、薬の値段が非常に高い。貧しい国の人々が薬をつかえないためにエイズを発症してしまう。貧富の差によって生死が分けられているのだ。アジアやアフリカを視野に入れて考え、行動する必要がある。

10歳の時に、母親からH I V感染の告知を受けた。血友病の治療に使われた血液製剤で感染したのだ。自分は長く生きられないのだと思い、エイズを発症したら自殺しようと考えたこともあった。血友病＝エイズという間違った報道もあり、小学6年生のときにいじめを受けた。H I V感染を隠して生きていかなければならなかった。投げやりな中学時代を過ごし、ただ働きたくないから、どうせ死ぬのだからそれまで親に面倒を見てもらえばいい、という気持ちで高校に進学した。

高校時代に転機があった。選択科目を決める段階で将来を考えられるようになった。また、その

ころ母親が入院し、「親がいることは当たり前のことではない」ことに気づかされたことがきっかけだった。将来の職業を真剣に考えるとともに、エイズについても学び始めた。

血液製剤によってHIVに感染した人たちが国と製薬企業の責任を追及する裁判をしていた。私は最初から裁判の原告団に加わらなかった。国を相手にした裁判は最終的には勝てないこと、また何十年もかかるため、健康を第一に考えていた父は裁判に反対していた。しかし、「何をやったって無駄だ」という私の一言を聞いた母が離婚を決意し、私に裁判をするかどうか聞いてきた。私も裁判に対して関心を持ち始めたころだったので、裁判をすることを決めた。両親は離婚し、私は東京HIV訴訟原告団に加わった。

異例の匿名で行われた裁判で学校にも裁判のことは隠していた。裁判所に通ううちに、感染のことを知っても自然と接してくれる環境ができた。自分のことを守ってくれる人たちがいることがわかり、友達に打ち明けられるようになった。最初は、自分がHIVに感染していることを話すことで、相手に重荷を負わせることになるのでは、という危惧があった。しかし、感染を打ち明けた友人からの、「昨日のおまえと今日のおまえは何も変わらない。同情はしない」という言葉に勇気もらった。横浜で行われた国際エイズ会議の時に、隠れずに堂々と生きていきたいと思えるようになった。

1995年3月6日の実名公表は、日本社会に予想以上のインパクトを与えた。大学生を中心に若い人たちが「自分たちにできることはないか」と裁判支援に動き出していった。大学の新生歓迎フェスティバルで講演会が企画され、700人の大学生が僕の話聞いてくれた。そこで薬害エイズの悲惨さと官僚の無責任さに気づいてくれた若い人たちは、厚生省に《あやまってよ》と計画した。それが「人間のくさり」であった。

その「人間のくさり」には全国から3500人もの人たちが集まってきた。組織された人たちが動員で集まったのではなく、個人個人の若い人たちが自発的に参加した集会であり、それは画期的なことであった。「人間のくさり」以降、全国各地に運動は広がり、医療機関による不買運動や、厚生省前の原告座り込みに集まった世論は、薬害エイズに対する裁判、社会を大きく動かしていった。

沖縄へ講演で初めて訪ねたときに、平和祈念資料館で第2次世界大戦における沖縄戦の真実を知った。沖縄がアメリカによって占領されていく過程や、日本軍によって、あるいは「集団自決」によって、多くの命が奪われたことを知り、戦争の責任が曖昧にされていると感じた。この責任を曖昧にする国の体質こそが「薬害」の問題にも通底するものだと思い至った。裁判のためだけでなく、同じ過ちが今後も繰り返されないためにも、自分自身の体験を伝えていく使命を考えさせられた。

単に社会構造の問題だけでなく、命よりもお金や利益が優先される考え方にも、薬害などを引き起こしてきた原因はある。そのような考え方を変えていかない限り、薬害も、戦争も繰り返されていく。薬害エイズの経験を通して見えてきたのは、命や人権、平和が大事にされてこそ、自分の生活や、楽しく生きることができるということだ。

「薬害エイズからみた人権・平和」(川田)

平成16年12月15日 於 本学 2号館221番教室

